

【活動報告】

東京都公文書館 企画展示

「東京 1945 - 1954 / 「文化スライド」にみる 東京～昭和20年代」

東京都公文書館 史料編さん担当

小野 美里

1 開催の経緯と目的

(1) 企画

東京都公文書館は、2016年3月に『都史資料集成Ⅱ 図録東京都政1 「文化スライド」でみる東京～昭和20年代』（以下『図録東京都政1』とする）を刊行した。『図録東京都政1』では、東京都が都政広報のために作製・発行した「東京都文化スライド」（以下「文化スライド」とする）を素材に、様々な切り口から昭和20年代の東京の姿を紹介している。文化スライドとは、都が1952年（昭和27）から1969年（昭和44）にかけて作製した視聴覚教材である。168タイトルが作製され、区・市役所、支庁、公立小中学校、公民館、図書館などに配布された^{※1}。

『図録東京都政1』には、文化スライドのうち昭和20年代の東京の状況を特徴的に捉えた13タイトルが収録されている。しかし、収録を見送ったスラ

イド画像のなかにも、当該期の東京の諸相を伝える貴重なものが含まれている。そこで、2016年度の企画展示を検討する会議において、これら未収録画像も含め、昭和20年代に作製された文化スライドを活用したパネル展を行うことが決まった。

このように本展示はまず題材から決定し、テーマも文化スライドから見る昭和20年代ということに固まった。次に、どのような視角でスライド画像を選定し構成するかを検討した。特に開催期間（7月21日～9月16日）が夏休みと重なることもあり、幅広い年齢層の来場者が楽しめるものにしたいという思いがあった。議論の結果、地域ごとにコーナーを設け、各地域の状況を写したスライドを選定するとともに、可能な限りスライドと同じ位置の現況写真をあわせて展示し、来場者が対比できるようにすることとした。このため画像の選定にあたっては、場所が特定可能であることを第一義に置いたが、加えて当該期の社会状況や人々の息づかいが伝わるものを選ぶよう留意した。展示するスライド画像数は約70点に及んだ。

(2) 構成



平成28年度東京都公文書館企画展示
「文化スライド」にみる
東京～昭和20年代
2016年7月21日(木)
～9月16日(金) 入場無料
休館日
主日祝日・8月17日

【画像1】 展示チラシ

展示構成は、エリアを都心、近郊、多摩・島しょに分け、さらに旧都庁の所在地である丸の内周辺コーナー、文化スライドそのものの解説コーナーを別に設置した。これに加えて、各スライド随所に、子どもたちが写った画像及び東京の復興に大きな役割を果たした河川・港湾関係画像が見られることから、これらを素材としたコーナーを、コラム的な位置づけとして設けることにした。

こうした構成により、単にエリアごとの様子を伝えるだけでなく、この時代を生きた人々の姿や、東京の復興を支えた条件が垣間見られるようにし、展示内容をより立体的なものとするを企図した。

以上を踏まえ、展示構成は、以下の通りとなった。

タイトル：東京 1945 - 1954 「文化スライド」にみる東京～昭和 20 年代

構成：Ⅰ 丸の内にあった都庁、Ⅱ 文化スライドとは

Ⅲ 都心の街並み、Ⅳ 近郊の風景、Ⅴ 多摩と島しょ

〈コラム〉 子どものくらし・東京の水辺 〈DVD視聴コーナー〉

(3) 対象時期

本展示の対象時期は、昭和 20 年代（1945～1954）となっているが、文化スライドの作製が始まったのは 1952 年（昭和 27）であるため、展示パネルの多くは昭和 20 年代後半に撮影された画像となる。

それでは、この時期の東京はどのような状況だったのだろうか。東京は太平洋戦争末期、空襲により甚大な被害を受けた。終戦直後は、財政難・資材不足や激しいインフレに加え、度重なる台風の襲来を受け、復興には多くの困難が伴った。こうしたなか初代都知事安井誠一郎は、首都東京の都市整備を国家的事業として位置づける方策として首都建設法の成立を推進、1950 年（昭和 25）同法が施行される。文化スライドの作製が始まった 1952 年は、サンフランシスコ平和条約が発効し、日本が米軍を主体とする連合軍最高司令官総司令部（GHQ/SCAP）による占領から脱した時期である。東京における各施設の接収も、徐々に解除されつつあった。

このように、この頃の東京は、様々な課題を抱えつつも、終戦後の応急的な復旧から首都としての建設へと歩みを進める段階にあった。そこで本展示においては、来場者が、この時期ならではの貴重な光景を楽しむことができると同時に、当時の都政や社会状況について知ることのできる展示を目指した。

2 展示内容

以下では、各コーナーの内容を、スライド画像を交えながら紹介していきたい（【画像 3～4、8～16】の出典は文化スライドであり、キャプションにはシリーズ番号、タイトル、発行年を示した）。

(1) Ⅰ 丸の内にあった都庁

ここでは、当時丸の内にあった都庁舎と、その周辺の様子を展示した。



【画像 2】 展示風景



【画像 3】 第 8 輯「東京都議会」1953

展示パネルでは、解体中の旧都庁舎、仮庁舎だった日本赤十字社東京都支部【画像3】、1950年に再建された都議会議事堂、建設中の第一本庁舎の模型【画像4】の各画像を用いることにより、都庁の来歴や復興状況がわかるようにした。あわせて東京駅や丸ノ内ビル街を展示することで、都庁周辺の様子を伝えた。なお都庁の移転先となる新宿副都心には、当時まだ淀橋浄水場が広がっており、その様子も紹介している。

そして展示ケース内には、著名な建築家・丹下健三が設計した第一本庁舎の模型を展示した。この模型は、丸の内の第一本庁舎竣工後、ロビーに飾られていたものである。この時期の丹下が手がけた建築の模型は、今では非常に貴重なものとなっている【画像5】。

(2) II 文化スライドとは

本コーナーでは文化スライドの概要を示したうえで、当時スライドが実際にどのような形で用いられていたのかを紹介した。

2点のパネルを用意し、小学校の教室でスライドが上映される様子、農家において農業改良普及員^{*2}がスライドを活用する様子を示した。



【画像6】スライドフィルム

そして展示ケースでは、当館所蔵の文化スライドのフィルム【画像6】と、当時家庭で使用されていた映写機（川崎市市民ミュージアム蔵）の現物を展示した【画像7】。

(3) III 都心の街並み

戦後の混乱や人口集中に伴う様々な問題を抱えつつも、首都として復興途上にあつた東京中心部の姿を、計25枚のパネルによって展示した。そのうちのいくつかを、以下紹介する。

今ではもう見られない風景として、高速道路の高架が架かる前の日本橋（中央区【画像8】）、周囲に高層ビルが建てられていない聖橋（千代田区／文京区）、象が芸をする上野動物園の様子（台東区）、現在の雷門の位置にゲートが設けられている浅草仲見世通り（台東区）、開

発中の池袋駅東口（豊島区【画像9】）などを展示した。他方、現在とあまり変わらない神田神保町の書店街や、有楽町の通勤風景（ただし背後に英語の看板が写



【画像8】第17輯「東京の道路」1953



【画像4】第28輯「清ちゃんの日都知事」1954



【画像5】旧丸の内都庁第一本庁舎模型



【画像7】スライド映写機



【画像9】第17輯「東京の道路」1953

り込む)なども紹介した。このほか、バラックが写った数寄屋橋付近の空地、失業対策事業の一環だった道路舗装の様子、宿の無い人が横たわる上野地下道などを展示することにより、力強い復興の陰で、戦後の混乱がまだまだ収束していない状況を提示した。

(4) IV 近郊の風景

大正から昭和にかけて都心のベットタウンとして発達した23区外縁部を「近郊」とし、その様子を展示した。

コーナートップには田園調布にあった玉川温室村の画像を置き、住宅街となった現在とは大きく異なる田園風景を示した。さらに平井駅前（江戸川区）、大井三ッ又商店街（品川区）、東長崎駅前（豊島区）、十条銀座商店街（北区【画像10】）といった、多くの人で賑わう駅前商店街の様子を紹介した。他方、板橋駅前（板橋区）のパネルには、雨で道路が冠水している様子が写されており、社会インフラの整備が追い付いていない状況も伝わるようにした。



【画像10】第13輯「東京の商業」1953

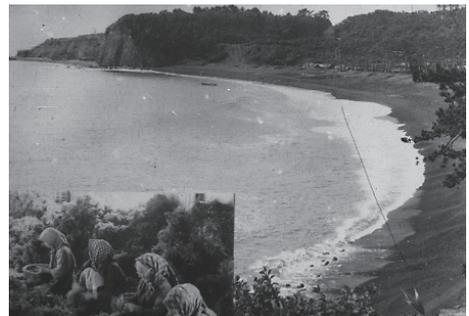
(5) V 多摩と島しょ

昭和20年代初頭の多摩と島しょ地域は、当時深刻な社会問題であった「食糧」の生産地として重要視された。

同時に、都知事安井誠一郎が重視した観光振興の上でも重要な位置づけにあった。パネルは、これらに関連する画像を中心に展示した。また、



【画像11】第29輯「東京の農業」1954



【画像12】第14輯「東京の島々」1953

展示ケース内には、当館所蔵の「流人御赦免并死亡覚帳 五冊之内一」（請求番号：656-08-02-01-01）・「流罪人送状」（請求番号：656-08-03-05-02）【東京都指定有形文化財】など、主にスライドに写っている資料の原本を中心に紹介した。

(6) コラム

〈子どものくらし〉

教育の諸領域においては、様々な民主化が行われる一方、食糧難に伴う体位の低下、戦災・人口増加による学校施設や遊び場不足、青少年の不良化といった課題が山積していた。本コーナーでは、こうした状況下で、子どもたちがどのようにくらし



【画像13】第23輯「一郎ものがたり」1954

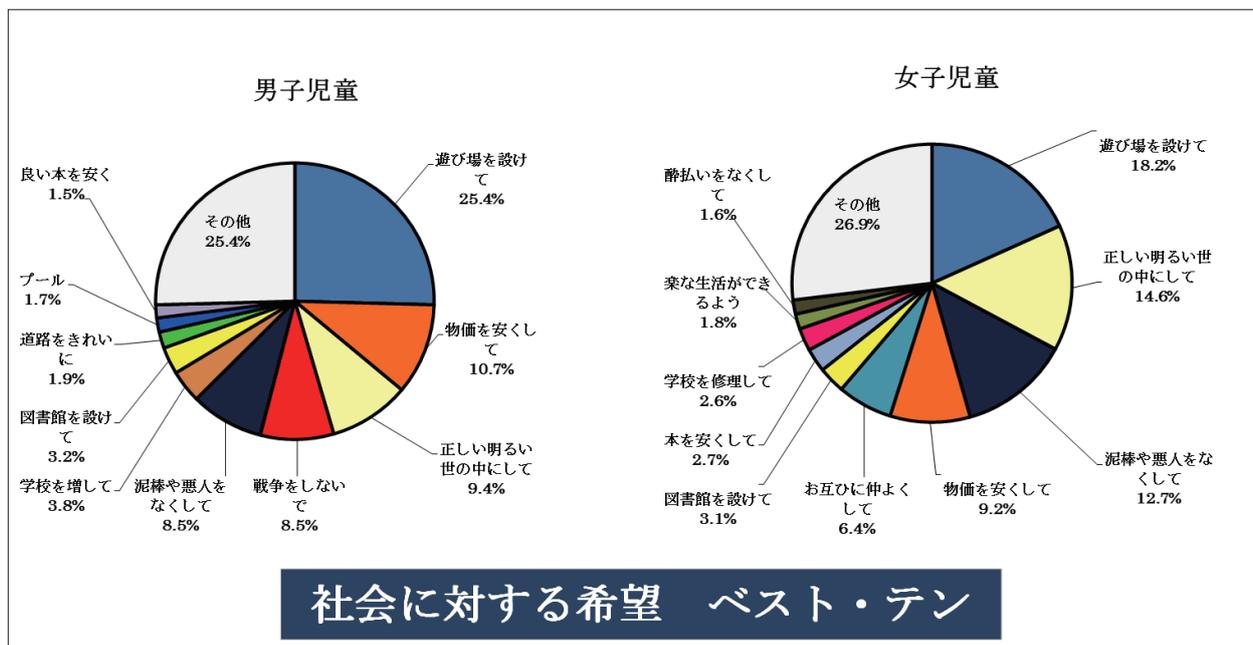


【画像14】第28輯「清ちゃんの日都知事」1954

ていたのかを展示した。

パネルは、まず二部教授（二部授業）や学校給食を写した学校内の様子を示し、次いで紙芝居、児童遊園、おもちゃ屋の前【画像 13】、子ども都議会^{※3}【画像 14】の様子から、地域における子どもたちの姿を伝えた。

展示ケースには、当館所蔵の庁内刊行物 2 点を展示した。一つは『新学制五ヶ年のあゆみ』（東京都教育委員会 1952 年 請求番号：教育 A 51）で、学校施設の復興状況を紹介した。もう一つは『東京都内小学児童の校外文化環境調査』（東京都民生局 1951 年 請求番号：福祉 D 224）という、当該期の子どもを取りまく環境や、子どもの意識を知ることができる資料である。このなかから「社会に対する希望 ベスト・テン」という項目をグラフにし、遊び場の増設や物価上昇の抑制といった、子どもたちの願いを具体的にみていった（下記参照）。



〈東京の水辺〉

ここでは、戦後の東京の復興を支えた水辺の諸施設を展示した。

具体的には、隅田川に架かる橋や乗合蒸気船、月島・深川に設置された水上小学校、東京湾と周辺施設（羽田空港、勝鬨橋、豊洲埠頭）、さらには日本橋川のしゅんせつ船^{※4}【画像 15】や、多摩川の砂利採掘の様子などを、パネルで展示した。これらを通じ、この時期多様な役割を果たした東京の水辺について理解できるよう心掛けた。



【画像 15】 第 25 輯「東京の川」1954

(7) DVD 視聴コーナー

今回の展示にあたり、文化スライドとその解説書（台本）を素材にして、DVD を作成した。そして展示スペースに DVD 視聴コーナーを設け、スライド上映イメージを再現した。タイトルの選定にあたっては、着色されてカラーになっているものが望ましいとして、「清ちゃん街に行く」【画像 16】、「東京の農業」（文化スライド第 29 輯 1954 年）を採用した。特に前者は、都が本格的な美化運動を始める前の街の様子や都市美化に対する都民の意識を窺うことができる非常に興味深い内容である。またモノクロだが、東京の顔ともいえる様々

な名所を写した「東京の観光」（文化スライド第12輯 1953年）もDVD化した。

3 成果と課題

(1) 来場者数とアンケート結果

展示開催期間（40日間）の来場者数は、956名にのぼった。このうち、展示目的の来場者数は437名だが、資料閲覧目的に来た方も展示を見学している様子が見受けられた。

続いて、来場者アンケートの結果について見ていきたい。アンケート回答者の年齢層は、12歳以下1%、13～19歳2%、20代7%、30代9%、40代17%、50代25%、60代22%、70代以上17%となった。50代以上の方が全体の6割以上となり、そのうち50代の比重が最も高かった。

当館の認知度に関しては、「当館を知っていた」37%、「当館を利用したことがある」14%、「今回の企画展示で初めて知った」49%という結果だった。約半数の方が当館の存在を知らなかったことになる。引き続き認知度の向上が望まれるが、本展示が、これまで当館の存在を知らなかった多くの方の興味をひき、実際に足を運ぶ契機になっていると捉えることもできよう。

本展示を知ったきっかけに関しては、「図書館など、当館以外の施設におかれていたチラシ」32%、「当館入口・門扉などに掲示されているポスター」19%、「当館のホームページ・フェイスブック・ツイッター」11%、「知人からの紹介」10%、「駅ポスター・中吊り」8%、「閲覧室で調査をしていたら開催していた」4%、「テレビ・新聞・ラジオ」3%、「当館以外、その他インターネット」13%となった。当館以外の施設に置かれたチラシの効果が高いことがわかる。さらに入口等の掲示物によって来場した方が、これに次いで多かった。なお、入口バナー【画像17】の掲示は初の試みである。

「企画の内容はどうでしたか？」という設問に対しては、「大変よかった」37%、「よかった」52%、「ふつう」9%、「もう少し」2%となり、概ね好評であった。

(2) 来場者の声

肯定的な感想として多く寄せられたのは、懐かしい東京の姿が見られて良かったというものであった。具体的には、「戦後復興期は自分の幼少期にあり、東京に生まれ育った者の一人として大変懐かしくも興味深いものでした」、「昭和20年生まれの私にとりまして、大変なつかしい子供の頃を思い出す展示会で良かったです」といった声を得た。東京の復興と自らの成長とを重ねあわせながら観たという感想が複数あり、本展示が来館された方によっては、生きてきた時代を振り返るきっかけにもなったことが窺われる。



【画像16】第22輯「清ちゃん街を行く」1954



【画像17】入口バナー

展示の技術的部分では、現況写真と合わせてスライド画像を展示したことについて、その変化に驚いた、時代の移り変わりがよくわかった、慣れ親しんだ風景の昔の姿がわかって良かったといった好意的な反応があった。また各地域の位置関係をイメージしやすいよう、展示スペースに床張りの地図を2点設けたが、これに対しても肯定的な評価を得た。

特に好評だったのが、DVD視聴コーナーである。なかでも「清ちゃん街に行く」の反響が大きかった。「ゴミの惨状→ポイ捨てが当たり前の時代があったことにびっくりです。今では考えられないことが多々あったんですね」、「江戸時代の東京のまちは世界に類を見ないほど極めて清潔で衛生的であったと聞いておりましたが、戦後の町の様子を観て少々驚きました」といった、都市美化に対する意識が浸透していない当時の様子に驚く声が多かった。なかには、インターネットで同DVDの動画を公開してほしいという声もみられた。

他方厳しい意見としては、展示数が期待より少なかった、展示の仕方に工夫が欲しい、原資料をもっと出して欲しかったというものがあった。こうした意見に応えるには、展示スペースが限られるなかでいかに内容を充実させ、資料の見せ方に工夫を凝らすかが課題となる。なかでも原資料をもっと出して欲しいという意見については、公文書館の展示に対する来場者の期待を物語っており、今後の参考としたい。



【画像 18】 展示風景

また、展示パネルに付したキャプションについて、スライド自体の内容解説と、写された対象物を説明したものが混在し、一貫性がないという指摘があった。これに関しては、資料の性質上、収録されたスライド全体の説明やスライド個々の意味を説明する必要がある場合もあり、担当者としても頭の痛いところであった。今回キャプションの字数を150字前後とした結果、簡潔で良かったという評価もあったが、限られた紙幅のなかで統一感のある記述をするのが困難となってしまった。この点は、次回に向けた課題としたい。

アンケートに寄せられた要望には、パネル・DVD以外の文化スライドも自由に見たいというものがあったが、実は当館所蔵の文化スライドは既に全てデジタル化されており、閲覧室の端末で閲覧可能である。この点、展示と合わせて案内すべきであった。また、本展示の続き（昭和30年代）を期待する声が多数寄せられたのは励みとなった。

(3) まとめ

最後に、本展示の画期性・意義についてまとめたい。

第1に、昭和20年代、なかでも終戦直後の混乱期と高度成長期のはざまの時にあたる20年代後半に焦点を当てたことにある。夏に開催される企画展示には戦時中のくらしや戦災について伝えるものが比較的多いなかで、この時期を扱った本展示は、特徴のあるものとなった。

第2に、文化スライドという非文字資料を中心としたパネル展としたことである。それにより、普段から歴史に関心を持たない方でも、東京各地の懐かしい風景やこの時期ならではの光景に、時に感慨や驚きを抱きつつ、楽しんでいただける内容となった。このことが、幅広い層の来館と肯定的評価につながったと考える。

第3に、文化スライドという視聴覚教材に光を当てたことである。文化スライド自体、あ

まり知られていない資料であり、アンケートでも、その存在を知り興味を持った、もっとたくさん見たいという感想を多く得た。もちろん、広報のために作製されたという資料の性質上、都によって選択的に写し取られた画像から構成されることは免れない。しかし、当該期の都政の課題を広範囲にカバーするとともに、都の対策を今に伝える資料として、相当な価値を有している。また、教育史の領域において視聴覚教育の歴史を跡づけるうえでも貴重な資料であることは間違いない。こうした資料の存在を、今回展示という形で対外的に発信したことの意味は、小さくないと考える。

文化スライドという特徴ある資料を用いた本展示の開催は、当館が所蔵する資料の多様性をアピールすることにもつながったといえるだろう。今後とも魅力ある展示を企画することで、幅広い層の利用者が当館に足を運び、当館の豊富な資料に触れる機会を設けることができれば幸いである。

【主要参考文献】

東京都『都政十年史』1954年 東京都『東京都政五十年史』通史／事業史Ⅱ 1994年

- ※1 文化スライドについての詳細は、太田亮吾「戦後復興期の東京における視聴覚メディアの活用と「東京都文化スライド」」（『東京都公文書館 調査研究年報〈WEB版〉』第2号、2016年3月）参照
- ※2 農業改良普及員は、都下25の相談所に配置され、農家の相談相手として、農業技術の向上や農家の生活の改善・指導にあたった。戸別指導のほか、講習会・座談会・研究会による集団指導を行い、普及活動において映画やスライドが活用された（東京都総務局企画部編『東京都政概要 昭和28年版』1954年、409～410頁）。
- ※3 第1回子ども都議会は1949年（昭和24）5月、子どもたちに議会政治のあり方を学んでもらうため、東京都と都教育委員会が開催した。議員には都内の小学校6年から中学3年までの男女100名が選ばれた。1952年（昭和27）5月、第4回子ども都議会が開催されたという報道があり、子ども都議会は1949年以降、年1回のペースで開催されたようである。1954年5月には東京都民生局の主催となり、名称も「こども都政協議会」となった。各地区代表の中学生120名が選ばれ、都政一般・建設・教育・衛生などを議論した（『朝日新聞』1949年5月7日、『読売新聞』〈都民版〉1952年5月18日、『毎日新聞』〈都内中央版〉1954年5月6日）。
- ※4 しゅんせつ船とは、海底や川底の土砂を吸い上げるしゅんせつ機を備えた船のこと。